Book Review 18-9 警察小説　＃熊と踊れ

『＃熊と踊れ(上)(下)』、『兄弟の血：熊と踊れ II(上)(下)』を読んでみた。著者はアンデシュ・ルースルンド：A とステファン・トゥンベリ：S（本書モデルとなった兄弟と実の兄弟）というスウェーデンの作家。A は『制裁』でデビューし、北欧ミステリの最高峰である「ガラスの鍵」賞を受賞。S はスウェーデンで大ヒットした映画『エージェント・ハミルトン』や、ヘニング・マンケル原作の TV ドラマシリーズの脚本に携わる。

本作は 4 冊合わせて 1,600 頁を超える大作である（読了に 1 カ月かかった）。実際にスウェーデンであった連続銀行強盗事件を下敷きにしている。

凶暴な父によって崩壊した家庭で育った三兄弟が、軍の倉庫からひそかに大量の銃器を入手する。そして、史上例のない銀行強盗計画を決行する。そこで市警の B 警部が、事件解決に乗り出す。リーダーである三兄弟の長男が、暴力的な父親を乗り越えようとして起こした事件ともいえる。一方、警察側の B 警部にも影のある家族関係が潜むことが描写されている。B 警部の兄は殺人犯（父親から殴り殺されそうになった B を助けるため、父親を刺殺した）で、懲役に服している。果たして勝つのは三兄弟か、警察か。

『兄弟の血：熊と踊れ II(上)(下)』はその後日談である。ここからはフィクションである（三兄弟は更生しているため、実際には罪を犯していない。そのためかインパクトが少ない）。三兄弟の長兄と B 警部の兄である殺人犯が刑務所で知り合い、新たな犯罪を計画し、B 警部に復習をしようとする話になっている。テーマは、事件自体ではなく犯人の三兄弟・父親の家族と B 警部の家族の歴史である。暴力が繰り返される家庭環境が、世代を超えて伝播してゆく恐ろしさ。その点が表現された例かもしれない。

さて、世代間連鎖によって起きる問題は、総合診療の事例検討会でよく取り上げられる。そのとき医療家系図（家族図）が役に立つ（遺伝疾患だけではなく、結婚、離婚、同居、死別、病気、軋轢、不仲などを約束事の記号を使って視覚化できる）。世代間連鎖は周囲の人々を巻き込んでしまう「社会的問題」と、自分の内面で起きる「心理的問題」に分けられる。世代間連鎖によって起きる「社会的問題」とは、親の問題に子どもが巻き込まれている状態と言える。そして、その子どもが、大人になって親となったとき、今度は自分の子どもを巻き込んでゆく。このように、親から子へ、子から孫へと世代間連鎖して

ゆく場合が多い。しかし、自分が望めば「世代間連鎖を断ち切る」ことは可能であるという。「今から考えや行動を変えていく」ことで問題を解決できると捉えることが重要である。
詳解すると大きく分けて以下の３つがあるそうだ。

1. 「虐待」の世代間連鎖
2. 「暴力」の世代間連鎖
3. 「貧困」の世代間連鎖

「虐待」とは、「過干渉、過保護、暴言、暴力、ネグレクト」など「子どもの人生に悪影響を及ぼす子育て」を指す。それゆえ、「世代間連鎖によって起きる問題」は決して自分一人の問題ではなく、祖父母から親へ、親から子へ、子から孫へと脈々と連鎖している問題である。なかでも、「暴力による虐待」は、親の「理不尽な言動」によって「心のトラウマの痛み」に加えて「体の傷の痛み」も合わせて感じることになり、その分「暴力による虐待」を受けた子どもは、心の奥底に「大きな怒り」を抑圧していることになる。よって、「暴力による虐待」を受けた子どもは、大人になって「怒り」が爆発しやすくなり、些細なことでも「暴言・暴力」を振るいやすくなる（本作の長男にあたる）。

「貧困」とは、前述の「虐待」や「暴力」とは違い、「心理的な原因」によってのみ「連鎖」するものではない。「社会状況」や「経済情勢」など様々な「外的要因」も重なった上で起きる問題である。貧困が次世代に続く一番の理由は、親の収入が低いために十分な教育費を出せないからである。そして、「貧困の世代間連鎖」として考えられる問題は、「教育格差・低学歴・低収入」、「ヤングケアラー（子どもや若者が家族の介護や日常生活上の世話を過度に行っている状況）」、「毒親（過干渉や暴言・暴力などによって子どもに重圧を与えたり、親の都合を優先し、子どもをかまわなかったりする親）」となってゆくそうだ。

本書は、世代間連鎖によって起きる暴力の悲惨さと社会的問題の大きさを告発している。